



平和・核廃絶に向けて

3回連載②

## 「世界中の核被災者の声に耳を傾けて」

— 明星大学教授の竹峰 誠一郎さん

今年3月に開催されたパルシステムとピースポルト共催による「平和・核廃絶に向けたフォーラム」で、「核問題は被害を受けた人々の視点から考えなければいけない」と訴えた竹峰誠一郎さん。核実験が繰り返されたマーシャル諸島や世界各地の核被災地で調査を続ける竹峰さんにその思いをうかがいました。



竹峰 誠一郎(たけみね・せいいちろう)さん  
明星大学人文学部人間社会学科教授。大学4年生からマーシャル諸島に通い続け、世界の核被災地でのフィールドワーク調査を進める。著書に『マーシャル諸島 終わらな核被害を生きる』(新泉社)ほか。  
(写真提供/竹峰さん、下の写真含む)

### 核被害は健康だけでなく、土地や暮らしも奪うもの

私が20年以上前から調査を行うマーシャル諸島では、1946年から58年にかけてアメリカによる67回の核実験が繰り返されました。第五福竜丸の事件(※)を思い出す人が多いと思いますが、現地に住む住民も被ばくしたのです。核被害というと病気など身体への影響が注目されがちですが、それだけではなく、住んでいた土地を失う、文化やコミュニティが失われてしまうなど、生活基盤が奪われ、いまでも自分の島に戻れない人たちがいます。

土地とのつながりが断ち切られたのは、広島、長崎への原爆投下に先立って世界初の核実験が行われたアメリカ・ニューメキシコ州の先住民も同じです。広島・長崎の原爆だけを考えても、コンゴなどでのウラン採掘に始まり、プルトニウム生成、兵器製造、核実験、核のゴミ処理など、世界各地でさまざまな核使用と被害があり、すべてがつながった問題です。核被害を考えると、そうした広い視点をもつことが大切だと思い、私は「グローバルヒバクシャ」という言葉を使っています。

※1954年3月1日、マーシャル諸島ビキニ環礁での水爆実験で1000隻程度の日本漁船が被災し、静岡県焼津港所属の「第五福竜丸」の乗組員1人が半年後に死亡した。

### 地球規模でとらえて連帯していく視点を

なぜ「放射能」という言葉も知らなかったマーシャル諸島の人々が核の犠牲を背負わなくてはならなかったのでしょうか。かつて日本も太平洋諸島を植民地にしたり、核のゴミ捨て場(放射性廃棄物の処分場)を検討していたことがあり、決して他人ごとの問題ではありません。

核開発は植民地や人種差別、先住民差別といった世界の不正のもと、立場の弱い人々に犠牲を押し付ける形で行われてきました。私たちが「核の安全保障」というとき、そのことを忘れてはいけません。

それぞれの核被災地での問題を地球規模でつなげてとらえ、各地の被災者と連帯していくというのが「グローバルヒバクシャ」の視点です。東京電力福島第一原発事故被害に関しても、チェルノブイリ(チェルノブイリ)原発事故やマーシャル諸島の経験から学べることはあるはずだ。

核被害は世界各地で、現在進行形で起きていくことです。過去の出来事ではありません。大切なのは核被災地の人たちの声に耳を傾け続けることです。未来を考えるヒントも、その声を聴くことから見えてくるのではないのでしょうか。

(次回の7月4回は、「平和・核廃絶に向けたフォーラム」登壇者の原爆の図丸木美術館・岡村 幸宣さんの話をご紹介します)



米国の原水爆実験で生じた「核のゴミ」を格納するコンクリートドーム。マーシャル諸島の工二ウエトク環礁にあり老朽化による放射能漏れが懸念されている(写真/米国立公文書館)



(上) 2018年3月の追悼式典に参加した水爆「ブラボ」の実験で被ばくした住民。掲げているのは、式典の2週間前に亡くなった方の写真  
(下) マーシャル諸島の美しい海



「土地というのはわれわれとともにあり、われわれの身体の一部だ。土地はわれわれの心臓部でもある」

これはマーシャル諸島にあるロンゲラップ環礁の男性の言葉です。米国のビキニ水爆実験でロンゲラップの島民は「死の灰」を浴び、自分たちの土地を失いました。

今年3月5日に開催した「平和・核廃絶に向けたフォーラム」の内容は動画やWEBマガジンでご覧いただけます。



当日の動画はこちらから



WEBマガジン『KOKOCARA』はこちらから

## 放射能検査状況について

2022年度の検査数(カッコ内は検出件数)/2022年5月5日現在  
※最新の検査状況は下記左側の二次元コードよりご覧いただけます。

総計: 169(2) 不検出率: 98.8%

2021年度の検査数 総数2264(26) 不検出率98.9%

青果	19(0)	2021年度、れんこん(3.1Bq/kg)から放射能が自主基準内で検出されました。
しいたけ	3(2)	生しいたけ(3.8~9.4Bq/kg)、2021年度は生しいたけ(4.3~20Bq/kg)、岩手県産乾しいたけ・小粒どんこ(21Bq/kg)、冷凍食品の産直原木しいたけ(3.1Bq/kg)から放射能が自主基準内で検出されました。
他のきのこ類	7(0)	2021年度に続き、5月5日現在で放射能の検出はありません。
米・米飯類	0(0)	2021年産の玄米は28産地29検体を検査し、不検出でした。

牛乳、肉、卵	5(0)	産地ごとに定期的に検査しています。2021年度に続き、5月5日現在で放射能の検出はありません。
魚介類	6(0)	2021年度に続き、5月5日現在で放射能の検出はありません。
飲料水・飲料	3(0)	2021年度に続き、5月5日現在で放射能の検出はありません。
乳幼児用食品	16(0)	2021年度に続き、5月5日現在で放射能の検出はありません。
その他加工食品	110(0)	2021年度、うぐいすきな粉(5.2Bq/kg)から放射能が自主基準内で検出されました。

※乳幼児用食品のみ検出下限値1Bq/kg、その他は検出下限値3Bq/kg。



●週次の「放射能関係のお知らせ」はインターネットに掲載しています。  
●インターネットから見られない方はこちらにお問い合わせをお願いします。

パルシステム東京・パルシステム神奈川・パルシステム千葉・パルシステム埼玉・パルシステム茨城 栃木・パルシステム福島・パルシステム静岡・パルシステム新潟ときめき  
パルシステム 問合せセンター **0120-868-014** 月~金曜日:9時~20時 土曜日:9時~17時  
※通話料は無料です。 ※お問い合わせ内容の確認とサービス向上のために、通話の内容を録音しております。

パルシステム山梨 甲斐センター ■0120-28-5891 西桂センター ■0120-32-1061 一宮センター ■0120-21-9898  
パルシステム群馬 高崎センター ■0120-60-5118 渋川センター ■0120-36-3315 東毛センター ■0120-63-3735  
※センターによって、携帯電話からはご利用できない場合があります。